

本研究の目的は、どのように一斉授業において対話が行われるのか、一斉授業における対話の可能性について、聞き手の役割という側面から検討することである。一斉授業においては教師に指名されて発言する話し手だけでなく、聞き手となる子どもたちも授業参加をしているが、こうした聞き手の子どもたちの授業参加に関してはほとんど議論されていない。本研究では聞き手の授業参加に着目し、いかに一斉授業の場が対話的なものとなるか検討を行う。

一斉授業は、教師と指名された話し手によるコミュニケーションを中心に進行する授業形態であると考えられ、一斉授業に参加する子どもたちは全員が同じ考えを持ち、授業を進めているとも捉えられてきた側面がある。しかし、一斉授業においては、聞き手として参加する子どもたちも様々な応答を話し手や教師に対して行いながら授業参加を行っている。こうした一斉授業におけるコミュニケーションを「聞く」ことに伴う応答から捉えるため、本研究ではバフチンの対話論を分析の視座とする。ただし、バフチンの対話論を教育実践の解釈に援用する際には、個々の「声」の違いに基づく関係をどのように捉えるかという点、また、教師と子どもの対話的な関係をいかに捉えるかという点に関しては課題が指摘されており、この点に着目して実践を検討する必要がある。

以上の先行研究における課題より、聞き手の応答に着目した上で、どのように一斉授業において対話が行われるのかを明らかにすることを目的とした。この点を示すために、①一斉授業におけるコミュニケーションは聞き手の参加によってどのように行われるのか、そして②「聞く」ことを通して教師と子どもたちはいかに対話的な関係を築くのかという2点について、理論的・実践的検討をそれぞれ行った。

理論的検討においては、まず、バフチンの対話論において他者との関係がどのように捉えられているのかを議論した。バフチンによれば、対話は異なる「声」を持つ聞き手と話し手の関係が前提となるものであった。こうした関係において、聞き手が異なる話し手に対して自らの言葉を持ち、能動的に応答することによって、新たな「理解」に繋がることとされる。さらに、バフチンの対話論に関する議論を踏まえ、一斉授業における対話を捉える際には、特にその「声」の違いから生じる応答の連続性に注目することの必要性を指摘した。同時に、教師も聞き手と話し手による連続的なコミュニケーションにおいて聞き手となり、子どもたちへと応答していくこととなる。このように、バフチンの示した対話における他者との関係とは、対話における聞き手と話し手の「声」の違いに基づく応答的な関係であることを示した。

実践的検討においては、上記の理論的検討を視座として、一斉授業の事例をもとに分析を行った。一斉授業に参加する聞き手の子どもたちは、話し手や教師に対してどのような応答をしているのか、そして、これらの聞き手の応答によって授業展開に対してどのような影響が及ぶのかという点について検討を行った。聞き手は受動的に「聞く」ことで一斉授業に参加しているのではなく、教師や話し手に対して応答しながら授業内のコミュニケーションに参加していることが示された。さらに、個々の聞き手の応答に着目すると、それぞれに様々な意見や疑問がその応答の背景にあり、一斉授業は多声的なコミュニケーションを行っている場であることが明らかになった。

一方で、教師が子どもたちの発話を「聞く」際には、授業計画や学習内容など様々な点が考慮されることが推察され、授業計画との関連から教師の「聞く」ことについて考察を行った。その結果、教師が

授業計画との関連を視野に入れながら聞き手の子どもたちに応答し、聞き手の子どもたちも教師に対して応答することでコミュニケーションが進行していることが明らかになった。授業計画を持ち、学習内容を把握するという教師としての役割を果たしながら、次の子どもたちのコミュニケーションに対して影響を与える聞き手として、教師は子どもたちと対話を行っていることが示された。

以上の検討から、子どもたちや教師が聞き手として授業進行に関わることによって、双方向的な応答がなされ、対話へと繋がる可能性が示された。一斉授業に関しても、教師と子どもたち、個々の「声」の違いを見出しながら双方の応答に着目することで、新たな授業展開へと繋がり、授業計画とは異なる文脈において学びのきっかけを作り出す可能性がある。さらに、教師と子どもたちの双方が聞き、応答的な関係を築くことによって、一方向的なコミュニケーションが行われると指摘されていた一斉授業において、対話が可能になると言えるだろう。